

「萬葉集に於ける所謂形容詞の

カリ活用について」

——人麿作歌及び人麿歌集歌を

中心として——

木 村 龍 子

一、
上代の語法を考察する場合、不用意に後世の言語意識を以つてするならば、我々は当時の語法を無視するという過ちを犯すことになり、上代語の眞の姿を正しく理解することは不可能であると言わねばならない。何故ならば、言語は時代と共に変遷するという一面を持つため、語法もまた時代によつて相違し、各時代各時代にそれぞれの語法があるのであつて、現代語の文法が江戸時代の文法に通用しないように、文語文法の規範とされている平安時代の文法も、そのまゝ上代語の語法としては通用しないからである。上代の語法なるものを考えてみても、上代にのみ現われて平安時代以降には全く見られない。或いは痕跡的にしか存在しないという上代特有の語法があり、また逆に、平安時代以降には盛んに用いられるが、上代には未だ充分に発達していない語法もある。従つて、平安時代の語法で以

つて上代の言語現象を解釈しようとすれば、それはあくまでも後世的な解釈であつて、当時の語法としては正しくない、定石を逸した場合も出て来るわけである。これに關することの一つに、所謂形容詞のカリ活用がある。古今集に於いて、形容詞及び形容詞的性情を持つ打消の助動詞ズにベシ・ラム・ケリなどの助動詞が接続する場合は、例えば、

○露ながら折りてかざさむ菊の花おいせぬ秋の久しかる
べく(五、二七〇)

○秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人の恋しか
るらむ(十二、五八六)

○かのかたにいつからさきに渡りけむ浪路はあとも残ら
ざりけり(十、四五八)

の如く、カリ活用及び補助活用ザリを用いるのが一般的であるが、このようなカリ活用の例は、萬葉集、仏足石歌などの上代文獻にも例えば

○以波比古志古々呂波以末曾多乃志加里計留(神樂歌)

○多布止可理家利米太志可利鷄利(仏足石歌)

○伊米爾毛伊母我美延射良奈久爾(十五、三七三五)

○麻奈久曾奈良波古非之可利家留(二十、四四六一)
の如き実例が存在し、奈良時代中期には、既に「形容詞連用形十アリ」「打消し助動詞ズの連用形十アリ」の融合した「——カリ」「——ザリ」の形が発生していたことを知

ることが出来る。

ところで、所謂形容詞のかり活用というのは、もともと形容詞が動詞に比較して活用形が不完全であり、特に助動詞を直接下に接続させることが出来ないという不便を補つて発生したものであつて、語源的に言えば、助動詞がラ変動詞アリを介して形容詞に接続する「――クアリケリ」「――ズアリケリ」の形が次才に融合縮約して成立したものと
（註一）
言われている。

さて、萬葉集に於いても前掲の例の如きかり活用の例が存在しているため、萬葉集に於けるかり活用には何らの問題もないと考えられているからであらうか。或いはまた、歌という性質上最も重んじられる格調ということを考慮しているからであらうか。萬葉集に於いて形容詞及び打消助動詞ズにム・ラム・キ・ケリなどの助動詞が接続する場合、未融合形で訓めば五音句、七音句がそれ／＼六音、八音となるような時は、字余りになるのを避けて「――カル」「――ザル」のように融合形で施訓しているのが現状である。

しかし、こゝで注意しなければならないことは、前掲の融合形の例が新しい歌に限られており、萬葉才一期、才二期に属する歌や、人麿作歌及び人麿歌集歌に於いては明らかにかり活用の例が存在しないこと、しかも語彙によつて或いは活用形によつて融合縮約形になるのに遅速があると

いうことである。訓の明らかなかり活用のうち「無クナアリ」の融合した「無カリ」が最も多いのは、動詞「アリ」に対する必然性であらうが、「無カリ」のようにかなり早くからかり活用の現象を起した語もあるが語によつては融合しにくいものもあり、周知のように「如ク」に続くアリは平安初期の訓点資料に於いては言うまでもなく、平安末期や鎌倉初期に於いてさえも決して融合しないこと（註二）などは、大いに考慮しなければならないことである。

前述の通り、集中、その他の文献にもかり活用の例は見出し得るのであるが、

- (イ) 可奈之可利家理（万五、七九三）
- (ロ) 古非之可利家留（万二十、四四六一）
- (ハ) 安波射良米也母（万十五、三七四一）
- (ニ) 於豆間可良受夜（仏足石歌）
- (ホ) 等伎奈可里家利（万十四、三四二二）
- の如く融合形の存する語彙にしても、一方では、
- (イ) 可奈之久安里家牟（万二十、四三三三）
- (ロ) 古非之久安流倍之（万二十、四四〇八）
- (ハ) 阿良波左受安利吉（万五、八五四）
- (ニ) 安流倍久安里家留（万十五、三七三九）
- (ホ) 無常阿里家利（万十九、四二一四）

の如く未だ融合縮約していない形で用いられており、萬葉集に於いては融合形と未融合形とが併存していること、記

紀に於いては、

○岐美何余曾比斯多布斗久阿理祁理（記上・7）

（但し括弧内の数字は、岩波の日本古典文学大系「古代歌謡集」に附されている番号による。以下同様）

○許許呂袁陀邇迦阿比淑母波受阿良牟（記下60）

○夜弊能斯婆加岐伊理多多受阿理（記下107）

○企弭我蒼贈比志多輔妬勾阿利計利（紀・卷二6）

○伊志歌孺阿羅曆志（紀卷十四・81一本云）

○阿母孺拳曾枳拳曳儒阿羅母（紀卷十四82）

○倭柯矩婆能倭柯俱阿利岐騰（紀卷二十六117）

の如くすべて未融合形であつて融合縮約形は一例もないこと、更に平安初期の訓点資料に於いてさえも、例えば、

○知ルベカラク（西大寺本金光明最勝王經古点）

○受けたる性聰ク敏シカリキ（右に同じ）

○当に生レむと欣フ心重カラシ（彌勒上生經贊）

などの融合形と共に

○分別無クアラムトシタマヒシ

（西大寺本金光明最勝王經古点）

○終ニ施与セズ（不）アラム（聖語藏菩薩戒經点）

○无クアラ令メム（唐招提寺本金光明最勝王經）

など多数未融合形が存在していること（註3）を考慮すると、萬葉集に於いてはむしろ未融合形が一般的であつて、カリ活用は新しい歌にのみ見られることからしても、当時の語

法としては頗る破格であつたと言ねばならない。

たゞ、前にも述べた通り、集中には「カナシカリケリ」「クルシカリケリ」などの融合形と「カナシクアリケリ」「クルシクアリケリ」などの未融合形とが併存しており、時代的に言つていつから「――クアリ」「――ズアリ」が融合して「――カリ」「――ザリ」となつたかについては確言出来ないにしても、少なくとも、集中でも古い時代に属する人麿作歌及び人麿歌集歌、或いは萬葉一・二期に属する歌をカリ活用で訓むことは避けるのが穩当と思われる。というのは、記紀は勿論、統紀の宣命に於いてさえも、更に人麿作歌及び人麿歌集歌、萬葉一・二期に属する歌で、訓の明らかなものは例外なく「――クアリ」「――ズアリ」の未融合形のみであるからである。

しかるに従来の諸註釈書では、或る時は融合形で訓み、或る時は未融合形で訓むといつたように、訓詁の態度に一貫性がなく甚だ恣意的であつて、当時の語法としては相応しくない訓を施している場合が多いようである。

しかし、萬葉の作品が伝統を負つた歌であることを考えると、奈良時代の語法としてはすこぶる破格であるカリ活用を、無反省に萬葉のどの歌にも適用することは、少なくとも、人麿作歌及び人麿歌集歌、或いは一・二期に属する歌をカリ活用で訓むことは一考を要する問題であり、一字一音の仮名書きの例及び訓が截然として動かされないもの

以外の訓については、当然再検討する必要があると思われる。

憶良の貧窮問答歌の一節「……和礼欲利母貧人乃 父母

波 飢寒良牟 妻子等波 乞旦泣良牟……」の傍線の部分

は、「チチハハハウエサムカラム」と訓まれて、これまでに疑点のさしはさまれたことはなかつたのであるが亀井孝氏は、

「飢寒良牟」を「サムクララム」のつゞまつた形「サムカラム」で訓むことは、奈良時代の文法としてはすこぶる破格である。一字一首節の萬葉かなで書いてないかぎり、後世の「サムカラム」に対する奈良時代の形としては「サムケム」と訓むべきがすくなくとも定石である。

と述べ、しかしながら、この字面では「サムケム」とは訓めないで、従来の諸註釈書が従つていた「ウエサムカラム」の訓を捨て、「ウエコユラム」と改訓された（註4）。従来多くの註釈書の支持を得てはいたが、語法上許容出来ない難点を持つ「ウエサムカラム」に対して、亀井氏の訓「ウエコユラム」は、当時の語法として正に当を得た適切な訓であると言わねばならない。

集中の形容詞のうちカリ活用で訓まれている語は、新校萬葉集によれば三十近くあるが、人麿時代のカリ活用についての考察が私の目的とするところであつたので、一応時

代を萬葉才二期までと限り、人麿作歌及び歌集歌に見える「久シ」「苦シ」「術ナシ」「繁シ」「尊シ」「ベシ」「ズ」をとり上げ、それぞれの場合を検討してみたのである。しかしこゝでは紙数の關係上「久シ」「苦シ」「ズ」の部分だけを抜萃することにする。

二、

(1)

風吹海荒明日言応久君隨（七・二三〇九）人麿歌集
右の歌の才四句は、「ヒサシカルベシ」と訓まれて異訓を見ない。

ところで、形容詞がカリ活用の現現を起すのは、キ、ム、ケリ、シム、ベシなどの助動詞が、ラ変動詞アリを介して「——クラハリ、ルレ」の形から形容詞に接続する場合であるが、形容詞の連用形に助動詞が接続するといふ全く同じ条件の下にあつても、すべての形容詞が全く同等にカリ活用の現象を起すというわけではなく、そこには語によつて、或いは活用形によつて、おのずから相違のあることが看取出来る。ということは、「無シ」のように語によつては融合しやすく、多くカリ活用の現象を呈するものもあるが、形容詞とアリとの結合が固く、融合しにくい語もあるということである。

「如ク」に続くアリが、平安時代の訓点資料に於いては勿

論、鎌倉初期に於いてさえも、決して融合しないことは周知の通りであるが、「久シ」も「如シ」と同じように融合しにくい語であることが、春日政治博士によつて指摘されている^(註5)。即ち『西大寺本金光明最勝王經』の古点に於いて、明らかに附調されたものゝ限りでは

○將に死(な)むことも久(し)クあるまじ「不」。

○瘦せて死(な)む將ること久(し)クあるマジキ「不」を見つ

○死に趣(か)むこと將に久(し)クあるまじ「不」の如く融合されない形のみで、融合形の例は一例も見えていないのである。このように、「久シ」の融合形がなく未融合形のみ存することについて、春日博士は、

惟ふにこのアリは、形容詞に助動詞をつけるために動詞形とするアリではなく、経過スルといふ実質義を持つたアリであるからであらう。即ち、ヨカリキ、オホカラズなどの、単にヨシの過去、多シの打消を作る爲に入つたアリとは異なるからであらう。

と述べておられるが^(註6)、確かに「久シ」と結合しているアリには、実質的な存在或いは継続の意味が幾分残つており、このアリが完全に形式化した語ではなく、実質的な意味を有するというののために、「ヒサシクアラハリ・ル・レ」は融合しにくいものと考えられる。

以上のように、「久シ」は平安初期に於いても融合しに

くいという事実、それにもまして、萬葉一・二期に於いては訓の明らかなカリ活用の例が一例もなく、「久シ」のカリ活用のみならず、形容詞カリ活用の存在自体が認められないということを考慮すれば、集中でも古い時代に属する人麿歌集歌である問題歌の「応久」を従来の通り、「ヒサシカルベシ」と訓むことに、大きな抵触を感じないわけにはいかない。

集中「久シ」の融合した例のないのは勿論のことであるが、

和我多^{わが}妣^た波比^は左思^さ久安良思^{くあんら}(十五・三六六七)

の例に照合しても、こゝは「ヒサシカルベシ」と未融合形で施訓するのが穩当ではなからうか。

(2)

(A) 路後^{みちのしりふ}深津島山^{ふかづしま}暫君^{しばきみ}目不見^{めみえな}苦有^{くる}

(十一・二四二三人麿歌集)

(B) 夢之^{いめの}相者^{さうは}苦有^{くる}家里^{いへ}覚而^{おぼえ}播探^{はくたん}友手^{ともて}二毛^{ふし}不所^{ふしよ}触者^{ふし}

(四・七四一家持)

右の傍線の部分は、いずれも「クルシカリケリ」と施訓されている。従来の訓「クルシカリケリ」は、「クルシクアリケリ」の融合縮約形であるが、所謂カリ活用の発生は奈良時代の中期頃と見られており、記紀に於いて形容詞のカリ活用が現われていないのは勿論、萬葉集に於いても極めて新しい歌にしか見られないことからして、記紀歌謡とほ

と同時代に属する人麿歌集歌である(A)「苦有」をカリ活用で訓むことは、語法上いかにしても不可能である。従つて、こゝは未融合形で「クルシクアリケリ」と訓み、カリ活用の訓は避けるのが穩当と思われる。「クルシクアリケリ」とすると八音で字余りとなるが、句中に単独母音が含まれてゐるので、このような場合の字余りは差支えなく又この場合にはケリを補読しなければならぬが、人麿歌集歌には「不知来」(十一・二四一四)「恋在」(十一・二四四二)などケリを訓み添えた例があり何らの抵觸も生じない。

(B)は、家持の歌でかなり新しい時代の歌であるが、新しい歌であるから絶対にカリ活用で訓まなければならないということにはならない。何となれば、家持の時代にはカリ活用も次才に発達して來てゐるようではあるが、未融合形も依然として優勢であつて、萬葉集に於いては融合形と共に未融合形も多く用いられてゐるからである。家持の時代に於いても未融合形が多く用いられてゐるという事実や、家持にはかえつて古語や古形を用いた場合が多く、彼のかなり新しい歌にも未融合形が見られることなどを考慮すると、こゝも「クルシクアリケリ」と施訓するのが妥當していると思う。

(3) 打消し助動詞「ず」は、

1. 「ず」の連用形が副詞法に用いられること
2. 助動詞を直接下に接続させないこと
3. 命令形を欠くこと

4. 補助活用にザリのあること

などの点において、形容詞的な性格、機能を有していると言われている。「ず」は形容詞性の助動詞であるため、形容詞がそうであるのと同じく、キ、ケリ、ム、ラムなどの助動詞を直接下に接続させることは出来ず、その場合には動詞アリを介して「ズアリケリ」「ズアルラム」のような接続の形をとらねばならない。ズの補助活用ザリは、その起源において、ズの連用形にアリが付き、それが融合縮約して成立したものであつて、その成立事情は形容詞のカリ活用と趣を同じくしている。

今日においても、「せざること能はず」「帰らざる人」の如くズの補助活用は一般に用いられており、現代の我々の言語意識からすれば、このようにズの補助活用を用いることは当然で且つ自然な用法であつて、語法上何らの抵觸も感じない。しかしながら、上述の如く上代に於いて、形容詞のカリ活用が当時の語法としてはすこぶる破格であつたのと同じく、「ズアリ」の融合したザリも未発達の段階にあつたのであつて、ザリの完全な発達を見、それが自由に驅使されるようになったのは平安時代になつてからのことである。それ故従来に諸註釈書のように、如何なる場合

にもザリで施訓することは、語法上許容出来ないことであり、再考の余地があると思うのである。

集中のザリの使用度数を訓の明らかな仮名書きの例によつて表示すれば、次の如くであるが、

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
ザラ	ザリ	ザリ	ザル	ザレ	ザレ	計
4	0	0	1	1	0	6

いづれも比較的新しい歌に現われているものである。

これに対して、未融合形は、

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
ズアラ	ズアリ	ズアリ	ズアル	ズアレ	ズアレ	計
7	4	0	2	1	0	

の如く用いられており、この表によつても、萬葉集に於いては未融合形の方がはるかに優勢であることが分る。

(補助活用ザリの活用形毎にそれぞれの場合について考察すべきであるが、これも紙面の都合により、こゝでは連体形ザルの場合のみを取扱うことにする)

○何為命継 吾妹不恋前死物

(十一・二三三七七人麿歌集)

右の傍線の部分を、古義、略解、新考、総釈、私注、口訳、大成、新校などでは「コヒザルサキニ」と補助活用で施訓している。

ところで、ズの補助活用は、「——ズ・アリ」の融合したものであるから、例えば「不見有從」「不相有哉」の場合のように「有」字の表記があれば、未融合形で訓み得るのは勿論のこと、融合形で訓む可能性もあるわけである。しかし右の歌の場合のように「有」字の表記のないものをも果して融合形で訓み得るかどうかは疑問であり、たとえ未融合形で「——ズアル」と訓むにしてもアリは補説しなればならず、アリの訓み添えについても尙問題が残る。

さて、動詞、形容詞の活用形のうち、連体形の発生が比較的新しいということは一般に認められていることであるが、「ズ・アリ」の融合したザリの連体形ザルにしても、同様にかなり新しい発生と思われる。それ故集中でも古い時代に属する人麿歌集歌を新しい発生のザルで訓むことは不可能であり、語法上無理のない訓に改める必要がある。

形容詞のカリ活用や助動詞の補助活用ザリなどは、直接下に助動詞を接続させることが出来ないという形容詞や形容詞性の用法を補うために発生したものであつて、本活用で充分にその機能を果たすことの出来る用法には、大体に於いて補助活用は用いない。打消の助動詞ズの場合にしても、下に助動詞の接続する場合には、接続の關係上補助活

用ザリの形をとるのは当然のことであるが、下に助動詞の接続しない場合、特にズが連体修飾として用いられる場合には、例えば、「忘れ得ぬ人々」「人の住まぬ家」の如く、本活用の連体形ヌを用いれば事たりののであつて、このような場合には補助活用の連体形ザルを用いるいさゝかの必要もない。

しかるに、「書かざる作家」「帰らざる人」の如く、ズが体言に接続する場合にも補助活用ザルが用いられることがある。それは何ゆえであらうか。思うにこれは、ナリ、ベシ、ラム、ラシなどの連体形接続の助動詞がズに接する場合には、本活用の連体形ヌではなく補助活用のザルを用いるということから類推して、本活用のヌで充分にその機能を果し得る場合、即ち、下に助動詞の接続しない連体修飾の場合にもザルを用いるようになったのであらう。しかし、このように連体修飾の場合にザルが用いられるようになったのは、平安時代になつてからのことであつて、上代に於いてはかゝる用例を見ない。門前正彦氏によれば、平安時代の仮名文学に於いては、打消しの助動詞ズの連体形「ヌ」と「ザル」との間に使い分けが存しているということ、即ち、下に助動詞の接続する場合にはザルを用い、助動詞が接続しない場合にはヌを用いており、両者の使い分けが截然としていふことである（註8）。また、平安初期の漢文訓読文に於いても、ヌとザルとの間には大休の使

い分けがあり、下に助動詞を伴わない場合はヌを用いるのが圧倒的に多く、補助活用を用いる場合にしても、すべて未融合形が使われていて、明らかに融合形と認められる例は一例もないこと、次に、下に助動詞を伴う場合には補助活用を用いた例が多けれども、この場合にも未融合形のみが用いられているということが、同氏によつて論証されている（註9）。門前氏のヌとザルとの間に使い分けが存するという説は、当面の問題「不恋前」の訓を考える上に大いに参考にする必要があると思われる。

集中、連体形ザルの例は、「奈志許佐流良米」（十四・三四三〇）の一例が見えるが、この「奈志許佐流良米」の訓には諸説があつて一定しておらず、これをザルの用例として挙げるのは適当でないかもしれない。しかし、たとえ新校などの訓に従い「ナシコザルラメ」と訓んだとしても、これは助動詞に接続している場合であつて、これを以つて「不恋前」を「コヒザルサキニ」と訓むべき傍証例とすることは出来ない。

集中、ズが助動詞に接続する場合に於いてさえ融合形となるのは稀で、殆んど未融合形「――ズアル」となつていふこと、記紀に於いても、或いはまた、語法に於いて伝統的な古形を多く用いている統紀宣命に於いても

阿比淤母波受阿良牟（記・下・60）

枳拳曳儒阿羅母（紀・卷十四・82）

不行阿流已止(二八詔)

不念阿流方(二八詔)

不敢阿流良武(四一詔)

の如く、いずれも未融合形となつており融合形は皆無であること、更に平安時代の訓点資料に於いてさえも、

○豈に説か不アルこと得(む)や(山田本妙法蓮華經)

○安立(する)所の正法(に)非ずある性は……

○疲労を憚ら「ず」ある応し。

(雑集論)

(西大寺本金光明最勝王經)

の如く、未融合形「ズアル」が多く用いられていること(註10)を考慮すると、「不恋前」を未融合形で「コヒズアルサキニ」とは訓んでも、決して「コヒザルサキニ」と融合形で施訓すべきではないことが理解出来る。しかし、「不恋前」の字面を未融合形で「コヒズアルサキニ」と訓むことは、表記上の難点もさることながら、上代に於いて連体修飾の場合に「ズアル」の形をとることが全くなく、「ズアル」は平安朝になつてから、下に助動詞が接続する場合にとる「ズアル」の類推によつて発生したものと考えられ、ここは、旧訓、代匠記、評釈、全註釈に従い、「コヒセヌサキニ」と施訓して然るべきと思われる。

○大殿之此廻之雪莫踏禰数毛不零雪曾山耳爾零之雪會由米縁勿人哉莫履禰雪者(十九・四二二七)

右の傍線の句も、諸註釈書は融合形で「フラザルユキゾ」と訓んでいるが、この場合のザルも「雪」を修飾する連体修飾句として用いられており、こゝの「不」字も補助活用でサルと訓むのは正しくない。従来のように、補助活用で「フラザルユキゾ」と訓むべきでないのは勿論のことであるが、未融合形で「フラズアルユキゾ」とすべきでないのも前述した通りである。従つて、こゝは字面に即して「フラヌユキゾ」と施訓すべきではなからうか。「フラヌユキゾ」と訓めば字足らずの句となり格調上の懸念がないこともないが、それは、この長歌が、歌そのものの製作年代は古く、伝承されて巻十九に収められたものであつて決して新しい歌ではなく、集中でも極めて珍らしい形、即ち短句を重ねて作られた古歌謡形式の音数の整つていない長歌であること、それに「不零雪會」と対をなしている下の「零之雪會」の句も「フリシユキゾ」の六音句であることからみてさして問題はないと思うのである。

三、

従来の諸註釈書は、集中の形容詞を多くの場合カリ活用で訓んでいるのであるが、これまでにしば／＼論述した如く、萬葉一・二期に属する歌で訓の明らかなものは、例外なく「クアリ」「ズアリ」の未融合形のみで、明らかにカリ活用と認められる例は一例もなく、萬葉一・二期

の古い時代に於ける形容詞カリ活用並びにズの補助活用ザリ
 の存在は認め難いのであるから、萬葉集のいかなる歌をも
 カリ活用で訓むことは、少なくとも、萬葉一・二期の人
 麿作歌及び人麿歌集歌をカリ活用で訓むことは、語法上
 許容出来ない難点がある。従つて、人麿時代に属するよう
 な古い歌をカリ活用で訓むことは避けるのが穩当であり、
 「可奈之久安里家牟」(二十・四三三三)「古非之久安流
 倍之」(二十・四四〇八)「阿良波左受安利吉」(五・八
 五四)などの例を見ても明らかなように、萬葉人はこれら
 八音句も決して破調とは意識していないのであつて、カリ
 活用の認め難い時代の歌は、たとえ字余り句となつても、
 敢て未融合形「——クアリ」「——ズアリ」の形で施訓す
 べきものと思うのである。

〔註1〕『国語学辞典』形容詞の項 P296

〔註2〕春日政治博士『西大寺本金光明最勝王経古点の

国語学的研究』

P152

〔註3〕

註2の

P144
P156

〔註4〕亀井孝氏「憶良の貧窮問答歌の訓ふたつ」(『萬

葉』第四号)

〔註5〕註3に同じ

〔註6〕註3に同じ

〔註7〕佐竹昭広氏「短歌字餘考」(『文学』第十四卷五

号 P47
P48)

〔註8〕門前正彦氏「『聞きまがはさる』か『聞きまが

はさる』か」(『国語国文』第二十五卷十二号

P48
P54)

〔註9〕門前正彦氏「漢文訓読史上の一問題——打消助

動詞の連体形について——」(『訓点語と訓点資

料』第八輯)

〔註10〕註9に同じ

「今昔物語集の文体と語法」

——「……クシテ」「……クテ」・打消の

助動詞連体形・「如ク也」「如キ也」

「如シ也」をめぐつて——

福 山 布 威

一、
 今昔物語の文章に漢文訓読体のものと、仮名文の系統を